

《特集：「国際社会学」とは何か》

## 国際社会学の射程

——研究・教育実践を踏まえて——

石 井 由 香

### 1. 「国際社会学」のあゆみと私

第16回筑波社会学学会大会（2004年5月1・2日開催）における特別企画シンポジウムのテーマは「『国際社会学』とは何か」であった。私はそこにコメンテーターとして招かれ、報告に即しつつ私見を述べる機会を得た。本稿はその際のコメントを元に、現時点で私が考える「国際社会学」において重要ではないかと思う点について、研究・教育実践を踏まえて記そうとするものである。

国際社会学は21世紀初頭の今日、確立した分野ということができのだろうか。この点について筆者は懐疑的である。また、国際社会学という「分野」を学問世界のなかで単に権威づけ、制度化することに意味があるわけでもないだろう。ただし、最初にお断りしておくべきことは、私は、現代社会の問題を考える上において、国家の枠組みに留まらない分析が必要とされる場面が多くあり、この分析の視点をどのように確立していくか、またこうした分析の視点を踏まえてどのような世界観を構築していくかという点に大いなる関心を抱いているということである。この視点や世界観を仮に日本で「国際社会学」という枠にいれることで人々に認識されやすくなるという現状があるならば、それでよい、と考えている。

日本における国際社会学の成り立ちには、日本ローカルの事情がある。であるからこそ、私はその内容（思考方法、枠組み）は一体何かということに敏感でありたいと思う。そのことが、日本の国際社会学を知的に開かれたものにすることにもつながるだろう。

多くの社会科学的概念と同様、「国際社会学」も、論者の数だけ定義があるというのが現状だろう。とすれば、私がどのような立場で「国際社会学」に関わっているのかについて述べることに一定の意味があろう。私は、国際社会学が構想された場の一つである津田塾大学、同大学院で学び、マレーシアのエスニック問題を最初のテーマとして研究を始めた<sup>1)</sup>。当時の指導教員は梶田孝道氏であった。また、博士論文を提出したのは筑波大学であるが、この際の主査は駒井洋氏であった。つまり、今回のシンポジウムの報告者お二人が私の指導者であったというわけである。

今回の報告者お二人は、日本における「国際社会学」第一世代、つまりこの分野を作っ



た方々の代表とも言えるであろう。この第一世代に続く形で数名の研究者の方々がいらっしやり<sup>②</sup>、私はこの第一世代の教え子の最も年配の世代にあたる。自己定義としては国際社会学第三世代、である。学部時代からの学習の場においては、国際社会学という科目がとりあえず存在していた。国際社会学の創生期から発展期に教育を受け、自らの研究を開始した世代である。

国際社会学の構想が芽吹き、育っていく過程については、それぞれ第一世代の方々が語られるであろう<sup>③</sup>。私など第三世代は、そうしたなかから生み出された著作、研究論文による影響を受けつつ育ってきた。また国際社会学が発展していく過程において、論文執筆などの形で少しずつ当事者として関わる機会も得ている世代である。

書籍のタイトルを中心に国際社会学の「研究史」を追ってみると、表1のようになるだろう。駒井氏が御自身の関わられた著書で最初に「国際社会学」をタイトルに使用されたのは1985年である。単著では1989年になる。梶田氏は1992年に教科書『国際社会学』を編んでおられる。教科書の出版は大学の講義の一つとして「国際社会学」が徐々に確立しはじめたことによる、教育における需要に応えようとする試みと考えることができよう。また、1995年の放送大学における「国際社会学」の放映も、こうした流れの一つとみることができる。

その後、叢書が編まれ、社会学全体を対象とした講座ものの一分野として『国際社会』がとりあげられ、また、『国際社会』そのものを対象とした講座ものが刊行されたことは、

表1 著書タイトルにみる日本の国際社会学研究史

刊行年	刊 行 物
1985	竹中和郎・駒井洋編『国際社会のなかの日本——国際社会学のすすめ——』有斐閣。
1989	駒井洋『国際社会学研究』日本評論社。
1992	梶田孝道編『国際社会学——国境を超える現象をどうとらえるか——』名古屋大学出版会（新版1996）。
1994	駒井洋監修「国際社会学叢書：アジア編」国際書院より刊行開始。
1995	放送大学「国際社会学」放映。 （梶田孝道編著『国際社会学』放送大学教育振興会。）
1996	梶田孝道監修「国際社会学叢書：ヨーロッパ編」国際書院より刊行開始。
	梶田孝道『国際社会学のバースペクティブ——越境する文化・回帰する文化——』東京大学出版会。
	寺谷弘壬『国際社会学』八千代出版。
1999	庄司興吉『地球社会と市民連携——激成期の国際社会学へ——』有斐閣。
2001	園田茂人『日本企業アジアへ——国際社会学の冒険——』有斐閣。
2002	小倉充夫・加納弘勝編『講座社会学 16 国際社会』東京大学出版会。
	宮島喬・小倉充夫・加納弘勝・梶田孝道編『国際社会』全7巻、東大出版会より刊行。

出所：筆者作成。



「国際社会学」という分野が社会学のなかで、さらに出版界において一定の市民権を得てきたことを意味するものであろう。講座を構成する論文の書き手が相当数育ってきたということも、議論の裾野の拡大を示すものであろう。

「国際社会学」に一定数の研究者、大学院生が集い、論集が編まれる状況は、確かに望ましいことに違いない。1985年の図書の出版から考えれば、すでに20年ほどの歴史を日本の「国際社会学」は持つことになる。しかしそのなかでどのような対象、視点が共通基盤とされてきたのであろうか。

## 2. 国際社会学の対象と視点——二項対立からの脱出——

現在国際社会学が何を分析対象にしているのか、ということを考えた場合に、それは「国境を越える事象」ということになる。しかし、国境を越える事象を対象とするとはいっても、どのような視点を持ち、またどういった立場からこの事象を見ていくのかということが重要である。

梶田氏の御報告のなかで、「国際社会学の比較社会的媒介」、「比較社会学の国際社会的基盤」という指摘があった。これは、「国民国家の相対化」という、国際社会学が持っているこれまでの社会学のありかたへの一つの批判的視点として従来指摘されている点をあらためて明示化したものであろう。梶田氏は、御報告のなかではこれを法律、人権といったレベルで論じておられる。これは、国家というレベルの「社会」を単位とした話であり、またそれぞれの国家が相互関係のなかであって、お互いに影響を与えあっている状況の分析の重要性を意味するものでもある。ただし、これだけならば、いわゆる比較社会学の枠組みとそれほど変わらないという批判も可能であろう。政策、法律はもちろん社会学的分析の対象になるものではあるが、このレベルの分析に国際社会学の視点が限られるものではない。

国際社会学の対象と視点を考える場合には、やはり生活レベルにおけるさまざまな営みを分析対象として考える必要があるだろう。その場合、国際社会学のなかでも重要なテーマであるグローバリゼーションの議論において提示されている視点であるが、単に一つの支配的な文化、価値観がすべてを覆い、画一化していくというのではなく、グローバルとローカルの間の相互作用、相互の関係性のなかで、ある文化、価値観がどのように受容され、あるいは変容するのか、またあるローカルからの問いかけがほかのローカル、あるいはグローバルなレベルでの変化を引き起こすのかという点に注目する必要があるだろう。この相互作用、相互関係が国際社会学の対象ということになり、またこの関係性の分析にあたって方法論が練られていくということになる。そしてさらに、このトランスナショナルな関係性と制度との結びつき方を考えていくことで、ナショナルないし国家（ステイト）



の問題をとらえることができ、単に狭い世界、ローカルな部分で起こっていることをそのまま記述するというレベルから、より深い考察へと脱していける突破口が見えてくるのではないだろうか。

具体的例をあげよう。たとえば日本人研究者によるアジアを対象とした「国際社会学的」と私が考える研究成果に、園田重人『日本企業アジアへ——国際社会学の冒険——』[園田, 2001]、と岩淵功一『トランスナショナル・ジャパン——アジアをつなぐポピュラー文化——』[岩淵, 2001] がある。この二冊の内容を概観してみよう。

『日本企業アジアへ』では、東アジアないしは東南アジアに進出していった日本企業を中心に、様々な企業運営、現場管理のあり方が、現地従業員にどのように受け取られているのか、という点について調査している。さらに日本人駐在員に対しては、駐在経験が自身に持つ意味についてこれもまた調査をしている。本書では、単に現地で働いている人たちの観方をとらえるだけでなく、日本人の駐在員の観方のみを取り上げるのでもなく、それぞれの意識と相互のまなざしを見ていくことで、その間で形成される関係性とは一体どういうものなのかをとらえようとしている。また、その中で、企業運営の方法がどのように変わっていくのか、あるいは変わっていく可能性があるのかについて考察している研究でもある。

それぞれの企業の生産現場はローカルなものである。しかし、そこで起こっているのはローカルとグローバルの相互作用である。多国籍に活動する日本企業は、グローバルであり、なおかつ日本という一つのローカルな特性を持ったものとして考えられる。しかし、日本企業は日本のやり方をそのまま現地という日本とは違うローカルに押しつけようとはしていない。それが不可能であること、また地域によって受けとめられ方が違うこと＝ローカルの多様性に企業および駐在員は気がついており、それぞれのローカルな現場にどのように「現地化」していくのか、特殊な事情を踏まえつつ普遍的に通じるやり方は何かを模索している。

また、現地従業員は、日本企業で働くことのメリット、デメリットを冷静にとらえている。自分たちの労働文化のあり方に即している部分や、自分たちにメリットのある部分については受容し、異なる部分、不利益になる部分については否定的に見ている。また、日本以外の外資系企業との比較のなかで、日本企業を評価している。日本企業も「みられている」のである。ここにおけるまなざしの交錯こそ、グローバルとローカルの相互作用の一つの事例であろう。

『トランスナショナル・ジャパン』は、テレビ番組や J-pop など、日本のポップ・カルチャーの東アジア、東南アジア諸国への拡がり进行分析する。それが単なる受容ではないこと、現地の人たちが、その内容を自らの持つ文脈により解釈し、享受している様相が示される。また、台湾、香港などのアイドルに典型的にみられるように、日本のポップ・カルチャーおよびその製作ノウハウを咀嚼した上で、自分たちの文化として発信を行う状況も



見られるようになっていっていることにも注目がされている。日本文化が単純に浸透していつている、東アジア、東南アジアが文化的に画一化していつている、そういう議論では全くない。そこで示されるのは、経済的、政治的、社会的、文化的重層性のなかでの、文化的グローバリゼーションのダイナミクスである。ここでも、ローカルとローカルの対話、グローバルとローカルの相互作用の様相を読み取ることができよう。

この二冊の非常に興味深い書にとどまらず、私が直接の研究テーマとしているエスニシティ、人の国際移動においても、興味深い論点が提示されるようになっていっている。例えば日本におけるエスニシティ研究の動向を見てみると、移民コミュニティを対象としたフィールドワークに基づく研究は数多い。しかし、最近ではホスト社会の日本人住民が同じ地域に共に暮らす移民をどう見るかといった視点の研究が出てきている<sup>40</sup>。今回のシンポジウムのコメンテーターである五十嵐氏もそういった調査をされているが、日本人と外国人の相互のまなざしのありかた。そこから生まれてきている関係性の検討が、研究課題として認識されてきている。そして、例えば日本の制度、企業といった組織における「文化」、あるいは宗教などのより生活と結びついた形での文化と、それぞれの関係性のあり方がどう結びついてくるのか、またこうした結びつきが既存の制度や文化のあり方を変えていく可能性を追求していくことは、ナショナル、さらにグローバルな視野を開く方向に結びつくとは私は考える。

さらに、こういった相互作用、相互のまなざしあるいは関係性を研究するに当たって、それぞれの主体が参照している基準そのものが非常に重層的であるという点に注意する必要があるだろう。グローバル、ナショナル、ローカル、という三層、分類の仕方によればさらに細分化することもできるが、この多層にわたってそれぞれの主体が持っている参照基準が多様化している。例えば、『日本企業、アジアへ』の日本企業で働いている人たちは、日本企業の現場における労働文化を自分たちの文化と比較をする。さらに労働条件や待遇を、他の日本企業ではない外資系企業、それはアメリカの企業であったりヨーロッパの企業であったりするが、こういったところと比べて、どちらの方がより働きやすいか、どちらの方がより自分たちの文化に合っているのかを考える。それぞれの主体がもっている参照基準が多層化し、さらにそれぞれの層のなかでも複数の基準を見ているというところに目を向けつつ、その行動と動態を分析していく。これが国際社会学の視点と方法であろうと思うのである。言い換えれば、グローバル・ローカルという単純な二項対立を脱することが、国際社会学の視点として共通の基盤になっているのではないかということである。

さらに、私は、アジアないし発展途上国研究に関して、もう一つの二項対立から脱する必要があるのではないかと考えている。日本における研究を見てみると、支配、従属という関係でのみアジアを見る傾向がしばしば強く感じられる。また、日本対日本以外のアジアという二分法も、根強く思考の根底にあるように思われる。



私はマレーシア、シンガポールを主要な研究対象としつつ、東アジア、東南アジア社会の動向に広く関心を持っているが、とてもそのような二分法ではとらえきれないダイナミックな変動が現れていると思う。例えば、New Rich という議論がある [Robison and Goodman, 1996]。トランスナショナルな人、物、資本、情報の移動にさらされている東アジア、東南アジア諸国の都市における中間層の出現と、彼らの動向をどのようにとらえるのか、ということは一つの大きな課題であろう。国境を越えて、文化的にも思考様式的にも共通性を持つ階層である。彼らのとらえ方についてはさまざまな論議があり、必ずしも独立した階層としてとらえきれない部分も指摘されるが、いずれにしても経済発展に伴い多様な階層構造、階級構造が現れており、このことに改めて注目する必要性があるのではないかという気がしている。

テレビのドキュメンタリーやニュースで、変化しつつある現在の状況が取り上げられることも多くなっているが、一般の人々の基本的なアジアへの視点がそれによって変化しているとは言えないように思う。未だに偏ったイメージが流布している。こうした状況に本格的に目を向ける研究者<sup>6)</sup>が、日本の場合まだ数少ないことも、こうした状況に拍車をかけているのではないだろうか。

一つ身近な例をあげると、私が勤務する大学では、日本人の学生たちのなかには、入学して最初のうちはアジアの人々は貧しいと思っている者が少なくない。かわいそうなアジアの人たちを救いたい、という意識で私の大学に来る学生が非常に多い。「停滞した」アジアのイメージしか頭のなかにはないのである。ストリート・チルドレンやスラムのイメージと言ってもよい。そこで私が講義でたとえば都市中間層の話をする。あるいは、あなたの隣にいる国際学生の友達がどういう出身の人かを考えてみたら、と言う。そうすると、そこで思考が止まってしまうということが起こるのである。大げさに言えば、学生のアジア・イメージが一気に崩壊する一瞬である。

確かにアジアの貧しさ、従属的状況は依然として問題となる部分であるし、その部分を捨象してアジアの社会についての考察をすることはできないのだが、それだけではとらえきれない現象がそこで起こっているのにもかかわらず、アジアのとらえ方が一面的に留まっていることに、私は悔しい思いがしている。

ここで書いたのは学生の話であるが、研究者のレベルでも、一部を除いて、一面的なアジアイメージで物を語る人は多いように私自身は感じている。現在のアジアの状況を可能な限り率直に見ていくことは、また日本の状況を考えることとつながっている。それは日本の、もしくはアジアの国際社会学を考えていくきっかけにもなるのではないかと考える。



### 3. 国際社会学の国際化——コンテンツの相対化——

私は、大分県別府市に2000年4月に開学した立命館アジア太平洋大学（APU）で、国際社会学担当の専任教員として開学当初より勤務している。この大学は、国内学生と国際学生の比率がおおよそ各50%で、英語と日本語を公用語とする国際大学である。

APUは日本の大学であるのと同時に、英語圏大学序列のなかに位置する大学である。この「位置付け」は、この大学で行う教育、さらに研究の内容に大きく影響を与えている。海外から来る学生に対して、私たちが教える内容（コンテンツ）が、アメリカやイギリスで教える内容と同じであるとしたら、この大学に来る意味がどれほどあるだろうか。率直に言えば、他の英語で教育を行うアジアの大学、たとえば香港、シンガポールの大学と競争して、日本の大学が勝てるとは思われない。また、海外、特にアジア太平洋の状況を知りたい日本人の学生に対して、準備すべき適切な内容とは何か。国内外の大学に伍することができる競争力のある魅力あるコンテンツとは何だろうか。

英語圏で共通となっている枠組みを教えることは確かに必要である。しかし、私はそれに加えて、アジア太平洋、少なくとも日本を含む東アジア、東南アジアの社会状況と課題について、できるかぎり社会学的にとらえようとする試みと、その内容の整理が必要なのではないかと思う。今私たちが生きている社会の課題に正面から取り組むということである。

方法としては、欧米圏で作られた枠組みを検証するという場合もあるし、実際の事象から枠組みを導き出すという、地域研究的なやり方もある。他地域の状況との比較、またアジア太平洋内における比較を伴いながら、アジア太平洋の普遍性と特殊性を導きだしていくという作業である。いずれにしても、日本の国際社会学が、日本の社会学のなかでトランスナショナルな視点の市民権を得るためといういわば国内的事情による特色ではなく、国際的な研究・教育潮流のなかでの独自性をいかに獲得するか、ということがもう少し考えられてもよいのではないだろうか。

それは、結局は自らの抱える問題を足元から考えていくという作業であり、中範囲の理論への指向性を持つものであり、グローバリゼーションとよばれる潮流のなかで、ローカルなものが立ち表れていくこと、またグローバルとローカルの相克のなかで新たな認識が生まれていくという、社会学的なグローバリゼーションの捉え方と合致するものでもあろう。アジア太平洋にあってアジア太平洋を対象とする、ということが安易な地域主義と結びついてはならないのである。「日本は特殊である」「アジアは固有性を持つ」とのみ語り、アジア太平洋の状況を特殊なローカルなものとして把握しようとするのはおおよそ現実に即した話ではなく、建設的な議論を産むわけでもない。そこで必要なのは、同時代を生きる人々のさまざまな社会的営みについて、自らが生きる地域の状況を中心に考えつつ、他地



域の状況についての真摯な検討をふまえながら、社会学的想像力をグローバルに広げていくことであろう。そしてそこに、健全な地域研究を基盤としたオリジナリティのある社会学的枠組みの構築が可能になるのではないだろうか。

#### 4. 国境を越える情報発信・交流の重要性

日本の国際社会学の相対化を考える上では、海外への発信もまた重要であろう。これは国際社会学に限ったことではないと思うが、日本の研究者は多くの場合日本語でのみ研究成果を発表するため、海外では日本国内で何が研究されており、どういった成果が出ているのかがわかりにくいという批判をしばしば聞く。闇雲に英語で発信すればよいというものではないが、学問内容、情報についての入超状態が続いていることは、否定できない事実である。

このことは、日本における社会学的研究の世界における孤立化を招いているようにも思う。アジア太平洋という地域一つを考えてもそうである。人的交流、研究交流の面で、東アジア、東南アジアの研究者たちは、英語を駆使してコミュニケーションをはかっている。また、オーストラリア、アメリカ、カナダ、イギリスなどの大学、大学院への留学経験者も多いため、こうした国の研究機関、研究者を媒介とした人的ネットワークも作られている。留学生のみならず、教員の国境を越えた移動も、英語圏では珍しいことではない。英語で研究・教育できる場所であれば、どんな場所に行くこともあり得る。私が現在いるAPUもその一端といえるわけであるが、英語圏世界ともいうべきものが、そこでは確かに形成されている。この世界から日本が今ひとつはずれているような実感があり、それは学問的認識を深め、日本の社会学、国際社会学を相対化していく上でも、決して望ましいこととは思われない。

ただし、ここ10年ほど、多少状況が変わってきているように見える。日本でも英語で論文を書き、海外で発表をする研究者が増えてきた。また、日本語で書かれた業績を英訳し、海外で出版する動きも起こっている。学会などの取り組みでも海外への成果発信を促すような動きが感じられる。日本での国際学会が増え、また、海外で開かれる学会で報告する研究者も増加している。

社会調査を行う者は、調査を行った場合、調査対象者もしくは対象となった地域の人々が読むことのできる言語での成果の発信を常に考えなければならない。現地に結果を還元することで、一方的な知識やデータの収奪者にならないようにしようとする心構えが、調査者にとっては重要である。自分に都合のよい言語で研究成果をまとめ、ほとんど人目に触れない形で発表を終わらせてしまうのであれば、それは自分の研究業績をあげるための研究でしかないことになる。出来る限り広く参照可能な媒体への発表を常に心がけること、



時に、海外での調査であれば、現地語もしくは英語での成果発表を行うことは、研究者としての義務と考えてよいであろう。

また、研究分野の発展を考えるならば、日本語だけの研究発表では、視野が狭くなる危険性があり、さらに、英語圏を中心とした研究世界のなかで、孤立してしまう可能性が高くなる。実際にはすでに孤立しているのかもしれないが、もちろん、日本語で、日本国内で議論すべき内容は確実に存在するし、それを否定するものではまったくない。しかし、同時に日本語以外の世界への発信を心がけることは、より健全な学問の発展の一助となるものだとも思う。また、共同研究、研究交流のさらなる推進も、その手立てとなるものであろう。国際社会学といった分野の研究者は、この点に関しては特に敏感である必要があると、自戒を込めて感じるものである。研究の現場そのものが、グローバリゼーションの波に洗われている状況のなかで、自らも国際社会のなかの一アクターであるとの自覚が、これまで以上に求められているのではないだろうか。

以上、国際社会学をめぐる、私が実践的に考える点について述べてきた。自らが国際社会学を学び、教え、その枠を基盤として研究をしている当事者の一つの記録として、この小文が読まれるならば幸いである。

#### 〈注〉

- (1) 具体的な研究成果については、次の書を参照されたい。石井 [1999]。
- (2) 第二世代の代表としては、伊藤るり氏（お茶の水女子大学）、町村敬志氏（一橋大学）、小井土彰宏氏（一橋大学）があげられよう。あくまでもこの世代分類は私見に基づくものである。
- (3) たとえば小倉 [1995] を参照のこと。
- (4) この点については、石井 [2003] で詳細な検討を行っている。
- (5) 岩渕 [2001] は、本格的にこうした状況に目を向けた研究の一つであろう。

#### 〈引用・参考文献〉

- 石井由香 1999 『エスニック関係と人の国際移動——現代マレーシアの華人の選択——』国際書院。
- 2003 「移民の居住と生活——現状と展望——」駒井洋監修・石井由香編著『講座 グローバル化する日本と移民問題 移民の居住と生活』明石書店、19～55頁。
- 岩渕功一 2001 『トランスナショナル・ジャパン——アジアをつなぐポピュラー文化——』岩波書店。
- 梶田孝道 1996 『国際社会学のパースペクティブ——越境する文化・帰帰する文化——』東京大学出版会。
- (編) 1992 『国際社会学——国境を超える現象をどうとらえるか——』名古屋大学出版会（新版 1996）。



駒井洋 1989 『国際社会学研究』日本評論社。

小倉充夫 1995 「国際社会学の構想」廣瀬和子・綿貫譲治編『新国際学——変容と秩序——』東京大学出版会、145～166頁。

Robison, Richard and David S. G. Goodman (eds.) 1996 *The New Rich in Asia: Mobile Phones, McDonald's and Middle-class Revolution*, London and New York: Routledge.

園田茂人 2001 『日本企業アジアへ——国際社会学の冒険——』有斐閣。

竹中和郎・駒井洋編 1985 『国際社会のなかの日本——国際社会学のすすめ——』有斐閣。

各の答ふての事、おのふて言ふと雖も一々せ。すまじ申と玉奉願十五、ア」まの時  
升本日の学会共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)

イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)

各の答ふての事、おのふて言ふと雖も一々せ。すまじ申と玉奉願十五、ア」まの時  
升本日の学会共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)

各の答ふての事、おのふて言ふと雖も一々せ。すまじ申と玉奉願十五、ア」まの時  
升本日の学会共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)  
イーエムエ、(イーエムエ、ア)まの共楽園の」まの共楽園の」まの共楽園の、(いしい ゆか/立命館アジア太平洋大学)